

ヨブは「魂を苦しめる全能者」、すなわち神の前で、言葉を発します。まず、神の前ではすべてが露わであるのに、神自身は覆い隠されている存在である、そしてその力強さを誰が悟り得よう、その美しさは何に比べられようと言います。人間が知恵を尽くして神を見出そうとしても、神は隠されている。その神が人間に語る言葉はそして、人間に言われた。「主を畏れ敬うこと、それが知恵／悪を遠ざけること、それが分別。」(ヨブ28:28)であり、そのことは、ヨブが初めから知っていて、それを実行してきたのです。神に忠実であったのに罪があるとされ、裁かれている。ヨブは再び嘆くしかありませんでした。堂々巡りの問答になるのです。

そして幸いだった日々を思い出します。それは神との親しい交わり、神が共におられた日々でした。あのころ、神はわたしの頭上に／灯を輝かせ／その光に導かれて／わたしは暗黒の中を歩いた。／神との親しい交わりがわたしの家に入り／わたしは繁栄の日々を送っていた。／あのころ、全能者はわたしと共におられ／わたしの子らはわたしの周りにいた。(ヨブ29:3)

ヨブが過去を振り返る中で、心をよぎった思いは、自分と同じように苦しむ者がいたことでした。人は、嘆き求める者に手を差し伸べ／不幸な者を救おうとしないだろうか。／わたしは苦境にある人と共に／泣かなかったろうか。貧しい人のために心を痛めなかったろうか。(ヨブ 30:24)ヨブは「全能者よ、教えてください」と神を呼びました。



エリフの怒り (1805) William Blake

その時、唐突に、ブズ人バラクエルの子、エリフが現れ、ヨブたちを怒りながら、言葉を発しました。彼はまず、

ここにあなたの過ちがある、と言おう。神は人間よりも強くいます。／なぜ、あなたは神と争おうとするのか。神はそのなさることを／いちいち説明されぬ。(ヨブ 33:12) エリフは年少者であることを恐縮しつつ、神と争うことが罪だと断言します。神の正義、全能に一点の曇りもない信頼を寄せています。その中で、心をひく箇所があります。

千人に一人でもこの人のために執り成し／その正しさを示すために／遣わされる御使いがあり／彼を憐れんで／「この人を免除し、滅亡に落とさないでください。代償を見つけて来ましたが」と言ってくれるなら／彼の肉は新しくされて／若者よりも健やかになり／再び若いときのようになるであろう。／彼は神に祈って受け入れられ／歓びの叫びの内に御顔を仰ぎ／再び神はこの人を正しいと認められるであろう。(ヨブ 33:23) エリフはここで憐れな者をとりなす御使いのイメージを告げているのです。この御使いによって、神に受け入れられ、正しいと認められるという言葉はキリストを指しているかのようです。

また、神は貧しい人をその貧苦を通して救い出し／苦悩の中で耳を開いてくださる。(ヨブ 36:15)と言って、神の、貧しい者、苦しむ者への憐みをも示唆しています。まるでヨブに寄り添うかのように、苦難を経なければ、どんなに叫んでも／力を尽くしても、それは役に立たない。(ヨブ 36:19)と言って、ヨブの苦難が良いこと、必要なことであると言うのです。

エリフは、ヨブをも、三人の友人たちをも、「高慢である、神を待つべきである、無駄口をきくな」と戒め、神の前に畏れと謙遜をもって立つように勧めています。エリフは最後に、全能者を見いだすことはわたしたちにはできない。神は優れた力をもって治めておられる。憐れみ深い人を苦しめることはなさらない。／それゆえ、人は神を畏れ敬う。人の知恵はすべて顧みるに値しない。(ヨブ 37:23)と言って突然、姿を消します。謎の人物といえるでしょう。エリフは、知恵文学と言われている「ヨブ記」で、人の知恵はすべて顧みるに値しないと述べているのです。